

## 【レポート】一般社団法人みつかるわかる代表理事・市川力さんと本屋アルゼンチンの共同企画「糸島ゆる合宿」を開催しました

2023年9/9-10に、ゆる合宿ナビゲーターの"りきさん"こと市川力さんと「糸島ゆる合宿」を開催しました。なんとなくあるき、えがき、かたり、ただ過ごした24時間についてレポートします。

### Feel度Walk体験

9月9日13時、子どもからおとなまで、年齢層も多様な12人がこっからオフィスに集まった。コンサルタント、学校の先生、中学生、親子参加、自営業、フリーランス……。福岡以外にも東京、広島、大分と遠方からの参加者もいて、なんのまとまりもない集団に。これがまたいい。

本屋アルゼンチンでは、これまでたくさんのイベントを開催してきたが、プログラムを作らずにイベントに臨んだのは今回が初めて。

みんなの感性や好奇心をゆるりと働かせてみたときに、なにが生まれるのだろう……。なりゆきにまかせて観察してみようとの試みだ。



「歩」という字は「止」まってばかりで、「少」ずつ進む。少し止まれば観察の感度が上がる。これが「Feel度Walk」。歩いて、止まって、観察する。「あれ?」「おや?」を、大事にして。

なんとなく 気になる。  
とりあえず 写真に撮る。  
あてもなく 追いかける。

「なんとなく」という言葉は、職場では嫌がられるという声があがった。僕らは根拠が求められる世界に生きているのかもしれない。「ゆる合宿」では「なんとなく」を大切にします。

ゆるさが「なんとなくセンサー」を発動させてくれる。



外に出たら、とりあえず バッタ。  
本屋アルゼンチンの芝生広場に暮らすバッタは、やたらとひと懐っこい。



なんとなく 海へ向かう。  
なんとなく 駅の周りを歩いてみる。  
なんとなく なんとなんく.....。



とりあえず 写真に撮る。



とりあえず 写真に撮る。

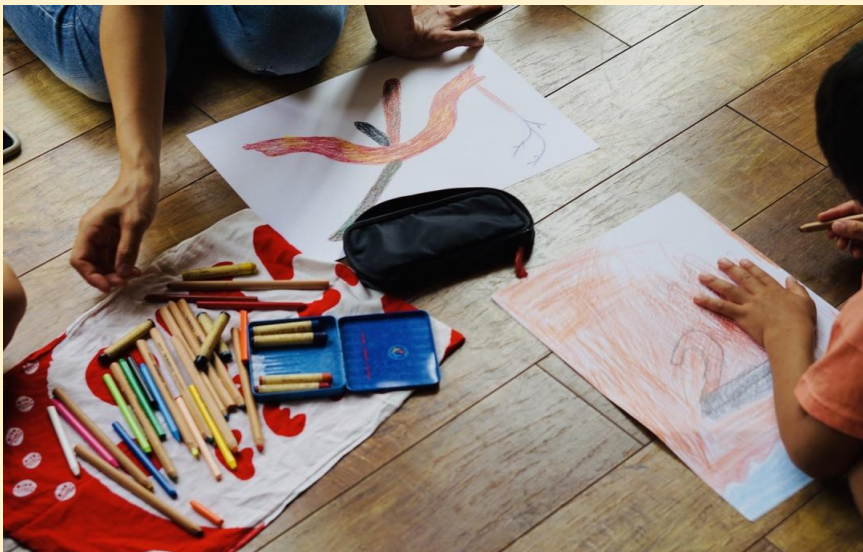
「海、山、田舎だけじゃない。都会の『Feel度Walk』もまたおもしろい！高校生が学校でやるのもおもしろい！学校を自由にゆるく歩くことなんてないからね。海も学校も自由に歩いてほしいんだ。列も道順も決まりはない。時間を気にせず歩く、このゆとりがいいよね～」と、海辺でりきさんが語る。



## 「知」図づくり



歩いたあとは、撮った写真を見直して、なんとなく気になった発見、思いついたことをスケッチしてみる。自分なりの「知」を表現するから「知」図。



同じ風景を見て描いたのに、切り取る場所も違えば、なにを描くかもひとりひとり違う。絵には、描き手の経験があらわれる。描き手の「知」層があらわれる。だから「知」図は、おもしろい。



仲間の「知」図を通して、自分が見ていない景色を知る。  
仲間の「知」図を通して、そのひとのことを知る。  
「知ってる」は、嬉しい。



## 食べ、飲み、語り、そして寝る

知図を描き終えたらみんなで宿へ向かう。  
大入駅の2番線から電車に乗って、隣の深江駅へ。  
知らない街をふらふらと、夕日に向かって歩く。



宿に荷物をおいたら、近くの浜辺で夕日を眺める。  
さえぎるものがない海で、ただまっすぐに太陽と向き合う。



古民家宿を貸し切った「ゆる合宿」の夜。  
どこか懐かしく温かい空気につつまれる。ただ、飲んで、食べて、語らうじかん。





ゆるさのなかで、生まれる会話。

りきさんは、なぜ「Feel度Walk」をやっているの？

ある日、ドキュメンタリーを見ていたら、スラム街で社会活動に取り組む女性にインタビュアーが質問を投げかけた。「あなたの活動では子どもたちを救えないのでは？」すると、女性はこう答えた。

「私はそうは思いません。人間は一生のうちの数秒でも生きた価値があると思えるかどうかで人生が決まるということを私は知っています」。

その女性の言葉に心を打たれたりきさんは、「ミームの一期一会性」に気づいた。

「たとえ家族や身近なところに自分を認めてくれる人がいなくても、「Feel度Walk」のように知らないおとなのなかに身を置いたとき、一度でもみんなに『おもしろい！』と言ってもらえた体験が、『死にたい』と思った時の子どもの命を救ってくれることがあるのではないか。

だから僕は『Feel度Walk』をやっている」。

(※ミーム：習慣や物語のような文化的な情報。言葉や行動により人から人へ伝わるもの)

参加者のTさんは、自身の「Feel度Walk」の原点について話してくれた。

コロナ禍でマスク不足が叫ばれていたある日、道端に落ちているマスクを見つけた。

「どんなに貴重だと言われているものでも、落ちていたらゴミになる」。この気づきが「Feel度Walk」をはじめのキッカケとなった。Tさんは、歩いて見つけた「落とし物」の写真を撮り、場所と日時を記録する。「落とし物」のストーリーに思いを馳せることが楽しいという。

「いつか落とし物の本を出したいな」と、夢を語ってくれた。

## ゆっくりする、たくらむ

「ゆる合宿」の朝は、ゆるい。深江駅9:42発の電車で揺られ、ふたたび大入駅へおかえりなさい。  
ゆっくりはじまる朝の過ごし方はさまざま。  
朝から海へ散歩するのもいいし、ゴロゴロと寝て過ごすのもいい。



りきさんが糸島のパン屋でたくさんのパンを買ってきてくれた。机に並べると、「パン屋ごっこ」がはじまる。プログラムをつめこまない「ゆる合宿」だからこそ生まれる、遊びのじかん。





## 教授の本棚

本屋アルゼンチン書店員の**みーさん**は元大学教授。みーさんが教授時代に読んでいた本がジャンルごとに箱に詰められ、こっからオフィスに眠っている。  
今回の「ゆる合宿」では、「教授の本棚」から、たまたま手にしたひと箱をたよりに本の旅に出る。



どんなテーマの本に出会えるかは、箱を開けてみてのお楽しみ。



福袋の中身をひとつずつ確かめていくあの感覚。



みーさんの手書きメモ、蛍光イエローで引かれたマーカー、しおり代わりにスタバのナプキン、生協のレシート、出版社から送られてきた手紙。  
本に残されたみーさんの足跡をたどりながら、本を読む。



気になる本を読んで感じたことを自由に模造紙に描きこんでいく。





書店員になったつもりで、読んだ本の紹介、感じたこと、描いたことを発表する。  
ひとりひとりの「知」がつながり、思わぬ発見が生成される。



「知」の共有を通して地域やみんなのことを知る、自分を知る。知ることは、嬉しい。  
「ゆるさ」は、ひとをより優しくする。  
サードプレイスって大切。  
止まって、見て、感じる(Feel)ことで、「自分たちごと」にすることができる。  
「ゆるい」は、濃い学びの集結。  
ゆるいって、実は濃い！  
ゆるさのなかに24時間身を置いたじぶんを見つけた。  
参加者から振り返りをいただいたところで、ちょうど13時。





学びで溢れた24時間。この24時間というのがまたよかった。  
プログラムは作るのではなく、立ち上がる。

あるいて、えがいて、かたるとひらく。  
自分であることを赦し合う、貴重なじかん。

ゆるにひたる。おもしろい～！